

2007年3月18日 受難節第4主日礼拝

『あなたの神に出会う備えをせよ』

(詩編 118 編 22-23 節、マタイ 21 章 31-46 節)

マタイの福音書では、イエスさまの最期の一週間のことが 21 章から出てきます。十字架に掛かるために、イエスさまはエルサレムに來られました。群衆は、叫びました「ダビデの子にホサナ、主の名によって來られる方に」。大人だけでなく、子供達もイエスさまを歓迎して叫んでいたのです。人々は、イエスさまのことを偉大な預言者だと思っていたのです。

イエスは、エルサレムでも人々に神の言葉を教えておられました。イエスが、神殿の境内で教えておられるのを見て、祭司長や長老たちがやって來ました。彼らは、イエスに質問しました。「何の權威でこのようなことをしているのか。誰がこのような權威を与えたのか」。イエスさまは、これに対して質問を返しました。「バプテスマのヨハネの洗礼は天からのものか。それとも、人からのものか」。ヨハネは神から遣わされた預言者か。それとも、自分勝手に悔い改めを呼びかけたのかという趣旨です。祭司長達は「分らない」と答える以外ありませんでした。どう答えても自分たちの立場を悪くすると思ったからです。

さてそれでは、イエスさまからの答えはどうでしょう。

イエスさまは、このあとお話しされた三つのたとえの中に答えを示しておられます。その中でも二番目のたとえは、イエスさまがどのような方なのか。イエスさまの權威は一体どこから來ているのか。それをよく示しています。

イエスさまは、二人の息子のたとえをお話された後こう切り出しています。「もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た」。家の主人とは、神様のことです。主人はぶどう園を作り、垣をめぐらし、その中に絞り場を造り、見張りのやぐらを立てました。主人は、自分のために垣根や、やぐらを立てたではありません。垣根は、ぶどう園に野獣や強盗が簡単に入って來るのを防ぐためでした。やぐらも、万一侵入者がいたらいち早く発見できるために立てました。それでも、主人は農夫たちが安心して働く環境をつくらうと惜しまず投資をしたのです。ここに、主人の農夫たちに対する愛と配慮が現れています。働くたち人への思いやる良い主人、これがわたしたちの天の父、神さまです。さて、このように主人は働きやすい環境を整備した上で、ぶどう園を農夫たちに託します。こうして主人は、旅に出ました。この話は、タラントのたとえとよく似ています。タラントの話は、主人が一人一人に賜物を預ける話です。ここでは、主人は農夫たちにぶどう園を預けて旅に出て行きます。主人が託したぶどう畑とは、神の国でした。

さて、収穫の時が近づいてきました。主人は、収穫を受け取るために、僕たちを農夫たちに遣わしました。主人が遣わした僕たちとは、預言者たちのことです。神の民は、主の遣わした預言者たちに対してどのような態度を取ってきたのでしょうか。旧約聖書にある

のは、人々が預言者たちの語る神の言葉を無視したということ。預言者たちは、神のことは語った為に、人々から迫害されたり殺された人もいたというのです。例えば、あの偉大な預言者といわれるモーセの場合もそうです。彼は、出エジプトの時の指導者で預言者の代表の様にいられています。しかし、モーセと同じ時にイスラエルの人々は、荒野の40年の間、何時もモーセに逆らい続けてきました。人々は、何度もモーセを殺そうと企てたといいます。「ある者を袋だたきにし、ある者を殺し、ある者を石で打ち殺した」。人々が預言者たちにしてきたことは全くこの通りでした。

それでも、ぶどう園の主人は、忍耐したのです。農夫が悔い改める機会を与えなかったからです。主人は、今度は前よりももっと多くの僕を農夫たちのところに送りました。しかし、農夫たちは一向に心を入れ替えない。何人の預言者たちを送られても、人々は全く変わらなかった。神様は、エリヤやエレミヤをはじめ、名もない預言者たちに至るまで、多くの預言者たちをお遣わしになりました。しかし、何人預言者が来ても神の民は頑なでした。まことの預言者たちの語る神の言葉を無視して、偽預言者たちの耳に心地よい話ばかりを聞きたがりました。

しかし、主人はそれでも忍耐しました。それで最期に自分の一人息子を送ろうと決めたのです。「わたしの息子なら、敬ってくれるだろう」悪い農夫たちもきっと心を入れ替えてくれるだろうと。この一人息子とは、イエスさまのことです。祭司長達がイエスさまにした質問。「何の権威でこのようなことをしているのか」。この質問への答えがここにありません。イエスさまは、父なる神のもとから来られた神の独り子です。天の父と等しい権威を持っておられる方なのです。この話のぶどう園の農夫のたとえば、最初はイスラエルのことだけを言っているように見えます。しかし、ここでイエスさまが出てこられた。それによって、このたとえばわたしたちにも関係のある話になってきます。なぜなら、神は世の全ての人々の為にイエスさまを遣わされたからです。ですから、このたとえば、神とわたしたちのことなのです。農夫は、イスラエルだけでなくわたしたちのことでもあるのです。それにしても、神様は何と思い切ったことをなさるのでしょうか。一人息子を、悪人の真っ只中に送るなんて。わたしたちだったら、とてもそんなことはできません。一人息子を、そんな悪人の元へ送るなんてとても出来ない。親としてそれが当たり前です。しかし、神はあえてそれをしてくださった。孤り子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためだったのです。こんな悪者のわたしたちの為に、神はそこまでしてくださったのです。

このイエスさまに対して、わたしたちは何をしたのでしょうか。農夫たちが、したことを見てください。38-39節「農夫たちは、その息子を見て話合った。『これは跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしよう』そして、息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺してしまった」。ぶどう園の農夫たちは、何故このようなことをしたのでしょうか。ぶどう園を主人から奪って自分のものにしようとしたのです。「これは跡取りだ。殺そう」と言っている事からも分ります。

この悪魔のような農夫たちは、わたしたちのことです。この農夫たちのように、わたし

たちは、神の子であるイエスさまを逮捕して、拷問した。イエスさまには、何の罪もないのに十字架に掛けて殺したのです。エルサレムの門の外に引きずりだして、呪われたもののようにこの方を木につるしてころしました。

悪魔のような農夫たちとは、わたしたちのことです。わたしたちは神にかたどって作られた。神様の作ったすばらしいエデンの園を託されました。でもわたしたちはエデンの園を神様から奪って自分たちだけのものにしかった。農夫たちがぶどう園を取り上げようとした。あの姿は、わたしたちがどんなに罪深いものなのかよく表しています。イエスさまはこんな罪人のわたしたちの為に命をすてられたのです。イエスさまを信じる者が永遠の命を受けるためでした。イエスさまは、人々に質問しました。ぶどう園の主人が帰って来たらどうするだろうか。人々は答えます。「この悪人の農夫たちを殺して、他の人にぶどう園を貸すにちがいない」。

人々は、この話は自分のことではないかの様に思っていました。すると、イエスさまは人々の目をさますようにこう言われました。「聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。『家を建てるものの捨てた石、それが隅の親石となった。これは、主のなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民に与えられる」と。祭司長とファリサイ派の人達は、イエスさまが自分たちのことを言われたのだと分りました。イエスさまへの怒りがこみ上げていました。しかし、群衆を恐れたのでこの時は何もしなかったのです。しかし、この人たちが中心になって、人々はこのたとえ話の通りにイエスさまを十字架に付けることになるのです。これが、この世のわたしたちのしていることです。

ふさわしい実を結ばなければ、といっても、わたしたちは罪人ですから。自分の力で良い実を結ぶことは出来ません。わたしたちが、自分の力に頼れば返って悪い実を結んでしまうでしょう。しかし、イエス・キリストに接ぎ木されるなら、わたしたちは変わる事ができます。「ぶどうの枝が木につながっていなければ実を結ぶことが出来ないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。(わたしはぶどうの木あなたがたはその枝である。)人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」(ヨハネ 15 章 4-5)。イエス・キリストに結ばれるなら神がわたしたち造りかえてくださいます。わたしたちが変わることが出来るようにイエスさまが、命を捨ててくださったからです。わたしたちの為に命を捨ててくださったあのイエス・キリストの元にこれからも生きていくこと。これが神の国への唯一の道です。

[説教者：堀地敦子牧師]